

Small CoRE Project 活動報告書

みんなの気持ち分かったよ！！

—幼児の感情表現の発達を促進させる心理教育プログラムの提供—

代表：小川 美紅（鳥取大学大学院医学系研究科 臨床心理学専攻修士2年）

【概要】

幼稚園は人生早期に所属する社会集団であり、幼児が初めて同年代の他者との関係性を築く場である。他者との関わりという共通の課題を持つ幼児に対して、幼稚園教諭は日々幼児の対人トラブルへの対応や指導に追われている。他者との関わりについて個別に指導することは、幼稚園教諭の業務を逼迫するだけでなく、特定の子どもが多くの指摘を受けることによるクラスの雰囲気の悪化が懸念される。そこで本プロジェクトでは、クラスの雰囲気をより良くすることができるような紙芝居を開発・提供した。

【活動】

幼稚園見学や、幼稚園教諭の方々の日々の困り感の聞き取りを行ったうえで、紙芝居の内容を「おもちゃの取り合いが起こった時の声のかけ方」に決めた。紙芝居はかもめ幼稚園の全幼児を対象とし、年少児、年中・年長児を対象とした2公演を実施した。紙芝居は、子どもたちがおもちゃを取り合った際、レンジャーが登場してお互いの声のかけ方（「貸して」など）を教える内容であった。“おもちゃを貸してほしいとき”，“おもちゃを貸してほしいと言われたとき”，“まだおもちゃを使いたいとき”の伝え方については、実際に子どもたちにも案を出してもらい、子どもの意見を反映させながら物語を進めた。紙芝居実演後は、幼児役の学生スタッフがおもちゃの取り合いをしている場面を演じ、代表の子ども5名におもちゃの取り合いを解決するレンジャー役を担ってもらった。レンジャー役の子どもは、学生スタッフのサポートのもと、喧嘩をしている幼児役の学生スタッフに対して、各子どもが考える声のかけ方について教える役を演じた。レンジャー役の子どもに教えてもらった声のかけ方を学生スタッフが実践し、おもちゃの取り合いが解決された場面を実





演することで、おもちゃの取り扱いの際の声のかけ方についてロールモデルを見せることができたのではないかと思います。公演の最後には、全幼児でレンジャーの決めポーズをして終了とした。

【評価】

本プロジェクトについてかもめ幼稚園の教諭からは、「第三者の視点から見る機会が今までなかったのよかった」、「今後発表会でも活用したい」というご意見をいただいた。その一方で、年齢に合わせた内容になっていないことについてもご指摘があった。今回の内容は年少児向けであったと思うため、年中・年長児に適用するにはプログラムを変更する必要があったのではないかとと思われる。

【今後について】

紙芝居は年中児・年長児の方が楽しんでおり、年少児にはやや長すぎた印象があった。また、おもちゃの取り扱いの際の声のかけ方について、年中・年長児になるとレパートリーが増えるものの、年少児は「貸して」、「いいよ」のやりとりしか見られなかった。よって今後は、年少児向けに内容を簡便かつ短くしたものを提供すると同時に、年中・年長児においてはより高度な内容を扱っても良いのではないかとと思われる。今回の1回だけでは効果は見られなかったものの、今後も継続的に活用したいとのご感想をいただいたため、回数を重ねるとより内容面の定着が測れるのではないかと思います。本プロジェクトを通して子どもの反応や様子を観察する中で、子どもの発達段階に応じたプログラム構成が必要不可欠であることを体験することができた。この度の経験を活かして、今後も学んだ知識を支援に活かし、地域に貢献していきたいと思う。